Title	活用しながら後世に日本の心を伝える：公益財団法人日本ナショナルトラストの事務所訪問の報告
Author(s)	木村, 美里
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.23-No.2, 2013.12：19-21
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5042
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

[研究ノート]

活用しながら後世に日本の心を伝える
―公益財団法人日本ナショナルトラストの事務所訪問の報告―

木村　美里

はじめに

「流した汗は、歴史に残る」―という言葉が、耳に残った。環境保護活動に携わる人々の、ひとつひとつの努力が、今日まで受け継がれている自然環境と歴史的環境の中で生き続けている。また保護されたものは、人と人とを結び付け、その心までも後世に伝えてゆく。日本にもこのような地道な保護活動を行う団体が数多くある。

本稿は、2013年５月28日（火）に行った、公益財団法人日本ナショナルトラストの事務所を訪問した際のヒアリング報告である[1]。今回は財団の総務課・課長の根岸悦子氏に貴重なお話を伺い、資料のご提供をいただいた。この研究調査の概要は以下の通りである。

１．財団の活動について

公益財団法人日本ナショナルトラスト（以下財団とする）は、1968年に観光資源保護財団として設立され、その後法人制度の改革により、公益財団法人として活動を行っている。また英国ナショナル・トラストを模範として創設された、非営利団体でもある。組織の役員は全てボランティアであり、財団の活動もボランティアの主体的な力によって行われている。活動の目的は、日本の貴重な自然環境および歴史的環境を観光資源として活用しながら、正しく後世に伝えることである。財団は公益性が高いため、寄付に対する税制上の優遇措置を受けられることも特徴である。

具体的な活動は、主に①観光資源の保護活用、②ヘリテイジセンターの整備・運営、③調査事業、④普及事業、⑤ネットワーク事業に分類される。

①の保護事業では、財団が取得した建物やSL列車などの保護のほか、寄贈や所有のみにとらわれず、地域との連携によって、観光資源としての保全および活用にも心がけて活動を行っている。この事業の一例として旧安田楠雄邸における活動が挙げられる。旧安田邸では当時の節句行事を忠実に再現するイベントなどの開催の場として使用されている。イベントの参加者は当時のままの建物と道具に囲まれ、それを実際に使用する環境と機会を得られる。したがって活用されることにより、文化財等は失われた慣習を取り戻す役割も果たしている。それゆえに財団では、文章あるいは写真のみでは感じることのできない、実際の体験ができることの意義を重視している。保護資産において得た収入は、その保護資産の運営および維持・修復にあてられる。また財団の運営は、会費、事業収入および事業賛助金等の寄付金によって賄われている。

②のヘリテイジセンターの整備・運営は、英国の団体シビック・トラスト[2](Civic Trust）の活動を模範とし、地域の自然遺産及び歴史的資産を活かしたまちづくりを推進する一環として、その拠点となるヘリテイジセンターの建設と地域への提供を行っている。この事業には、地元主体の運営・活用を通して、地域観光の活性化と国内・海外への情報発信を推進する特徴がある。

③の調査事業では、先述の事業を円滑に行う上で必要不可欠な基礎調査および学術調査が実施されている。

④の普及事業では会報の発行、会員のサークル活動の支援、ホームページの運用などを中心に、少人数のスタッフでの効率的な運営を行っている。また他団体との連携による普及活動も財団の特徴として挙げられる。事例としては、学生観光論文コンテストと寄付金のあるパーティープランの企画が挙げられる[3]。前者は若い世代の人々に将来への指針を考える機会を創出し、後者は財団の名前を広く一般に周知する役割を果たす。財団の意図は単発的な支援ではなく、継続的な支援の獲得にあり、そのための啓蒙を目的とした普及活動を展

開している。

⑤のネットワーク事業は、国内に多く存在する環境保護団体と情報交換、問題点の共有、意見交換、技術考慮などを行い、全国的なネットワークの支援を展開している。

このほかの事業として、震災被災地の支援も積極的に行っている。多角的に支援していくためのパートナーシップ、長期的なプロジェクトの企画により、一日も早い地域の復興を目指している。

財団の活動において、観光資源としての活用から、建築物の調査・保全が注目されているが、保護対象を限定することはなく、自然環境および景観の保護にも取り組んでいる。また財団では業者に委託する方法ではなく、地域に根ざした伝統的な手法を時間と費用をかけてでも伝えてゆくことが大切な役割であると考えている。

2．海外の環境保護団体との交流について

財団と他のトラスト団体（英国、アメリカなど）との交流は主に創設当時や創設に近い時期に行われていた。また近年では韓国のナショナル・トラスト団体が事務所を訪れ、熱心に財団の活動内容を調査していたとのことである。海外の視察では、勉強を主として実際の活動を見学する。ご提供いただいた資料の中には英国ナショナル・トラストの報告内容も掲載されていたおり、トラストの考えや活動を学ぶことができる[4]。

日本での英国ナショナル・トラストのイメージは、『ピーターラビットのお話』やワーズワスの詩の風景などが真っ先に思い浮かべられる。財団は英国ナショナル・トラストを模範としているが、日本の文化・制度に適応した日本型のトラスト活動を目指している。

3．財団の活動における課題

環境保護団体が直面する課題についても、お話いただいた。特筆すべきこととして、文化的・宗教的な相違に基づくチャリティー精神の希薄が挙げられた。チャリティー精神の希薄性については、トラストの先行研究でも指摘されている[5]。相続の側面においても、自立型で社会貢献を重視して一般に寄付をする英国スタイルに対し、家族を重んじ子孫に財産を遺す日本スタイルは根本的に異なり、同じ方法を用いることは困難であると述べられた。それゆえに財団では先述した日本型のトラスト活動を探究している。

また固定資産税などの税制上の手続きにおける、膨大で多種多様な資料の作成はやはり課題とされており、協力団体には活動を優先し、申請書類の作成等を避ける場合も見られるとのことであった[6]。

財政的な問題としては、国からの補助金は事業費のみにあてられ、寄付金も大半が主たる事業の保護事業に割かれており、その他の事務的な人件費、運営費、管理費などに多額の費用をかけられない点も挙げられた。それゆえに先述したボランティアで活動する人々の強い信念と努力によって、今日まで財団は支えられている。広報事業における財政課題についても、お互いWin-Winの関係となるよう事業を企画し、可能な限り費用をかけない手法で展開している。

普及活動の側面では、すでに活動している個々の意識は高いが、急速的な普及には至っていないことが挙げられた。しかしこの点は一朝一夕ではできないこともあり、着実に発展してゆく効率的な普及活動が模索されている。

おわりに

今回のヒアリングを通して、以前、有名な茶室を見学した際のことを思い出した。季節の彩を見せる美しい庭園、歴史を感じさせ、侘びさびの世界観を作り出す建物。しかしながら、その空間に静けさはなかった。電動の掃除機の大きな音に、水琴窟の音はまったく聞こえず、掻き消された。茶道の精神は、そこにはなかった。これでは苦労して保全している努力が水の泡となる。今回のヒアリングでモニュメントのような保全・公開方法

をするのではなく、「活用しながら人々の心を伝える」という手法は、やはり総合的な環境を保持していなければならないことを問いかけているように思われる。筆者が体験した茶室の例も、時間はかかっても、公開時間内は箒で掃くなどの手間と配慮があれば、その環境や建物に対して異なった印象を持ったのではないかと考えるからである。何事も自由で便利、合理的であればよいというわけではない。その意味で財団が手間や費用よりも優る、文化、伝統、人の心を後世に遺すために活用した保護活動を重要視し、実践している点に深く感銘を受ける。さらに財団の文化財などを活用する、ボランティアと地域主体の活動は、環境保護の将来に必要不可欠な要素である。

人と人との出会いと同様に、人と自然および風景との出会いも一期一会ではないだろうか。自国に適した環境保護政策を模索するとともに、それを支える環境思想の構築も重要であるといえよう。

（きむら・みさと　聖学院大学基礎総合教育部特任助手）

1　本研究はJSPS科研費24720040の助成を受けている。『聖学院大学総合研究所Newsletter』22－2号参照。

2　したがって財団はシビック・トラストの影響も受けている。シビック・トラストは「建築をはじめとする土木・造園・都市計画の分野における計画的な質を高めることを目的」としていたが、2009年に解散した。日本ナショナルトラスト創立20周年記念講演記録『イギリスに学ぶ町づくりの思想』（1990年、日本ナショナルトラスト）を参照。

3　この論文コンテストは、授業の課題として扱う大学もある。したがって財団は保護事業での実践的な環境教育とは異なる形でも教育に貢献しているといえる。

4　（財）日本ナショナルトラスト『第7回ナショナル・トラスト世界大会資料(抜粋)』（（財）日本ナショナルトラスト、出版年不明）を参照。

5　木原啓吉『ナショナル・トラスト』（三省堂、1992年）203頁。

6　書類の問題は、前回の研究報告「「永続する精神」の雲を見上げて―公益社団法人日本ナショナル・トラスト協会の事務所訪問の報告―」（『聖学院大学総合研究所Newsletter』23－1号）も参照。